東京医科歯科大学 女性研究者支援室
ANGEL OFFICE
Tokyo Medical and Dental University
Activation of Gender Equity / Gender Medicine and Enrichment of Life

NEWS LETTER

Vol.4
2010. 7

本学での女性研究者の役割やワーク・ライフ・バランスについて、トップインタビューを行いました。

Q1 先生の座右の銘を教えて下さい。
Q2 ご自身のワーク・ライフ・バランスについてどう思われますか？
Q3 少子高齢化時代の女性研究者の役割についてお考えをお聞かせ下さい。
Q4 2020年までに女性研究者比率を20%にするのにどんなことを実行しておられますか？
Q5 女性研究者へのメッセージをいただけますか？

大野 喜久郎 医学部長／脳神経機能外科学分野教授／女性研究者支援対策会議運営委員

A1 若い人には『臨床医には、「自他の経験に学ぶ」「足で稼ぐ」「転んでもただでは起きない」が必要です』と言っています。「足で稼ぐ」とは、実際にベッドサイドの患者さんのところで実学を学ぶ、ということです。「転んでもただでは起きない」とは、失敗から学んで次に生かすことです。

A2 趣味と言えるか分かりませんが、実益と兼ねて、毎日1万歩歩くようにはしています。ただ、自分の生活に関しては全く無視してこれまでやってきました。最近になって日曜日には自分の時間を持つようにしていますが、気づいた頃には家には2人だけという状況になってしまいました。自分自身は後悔していませんが、家族や親に大きな迷惑をかけていたと思います。

A3 日本の女性研究者数はまだ少ないため、日本や世界をリードする女性研究者を育てることが一つの目標です。女性脳神経外科医の割合は日本ではまだ3%前後ですが、30年前とでは時代は変わっています。そう遠くない将来、女性脳神経外科医と意識することのない時代が来ることが予想されます。

A4 女性研究者が継続して働けるような環境整備が必要です。学内に保育園も設置されたので、あとは病院でも基礎研究の分野でも、正規雇用での短時間勤務を導入することが期待されます。そのためには裁量労働制下での給与体系の変更が可能であることが前提です。これにより、勤務医や基礎研究者不足もある程度改善されるでしょう。

A5 当脳神経外科においても、女性医師が病棟で中心になって活動しており、また卒業生でも、研究論文で賞を受賞し、著名な研究施設で活躍している女性研究者が2名います。生物学的な男女の違いはありますが、研究能力や医学の技術取得には男女の差はありません。研究や医療の分野では女性の社会進出を阻む要因が比較的少ないと考えられますので、女性研究者の皆さんには、ぜひ研究を楽しく、長く続けて頂きたいと思います。

田上 順次 歯学部長／う蝕制御学分野教授／女性研究者支援対策会議運営委員

A1 臨床においては、仕事を楽しくやるように心がけています。自分が楽しく仕事をすることで、患者さんの気持ちも前向きになると思います。研究面では、常に新しいことにチャレンジすること。そして教育面では、学生に距離感を感じさせないためにも、学生とは本音で気取らずに接するようにしています。

A2 年代的にもポジション的にも、どうしても「ワーク」が占める割合は高いですね。ですので、家ではなるべく家族と話をするように心がけています。私には娘がいますが、小さいころはよく一緒にキャッチボールをしました。そのお陰か、今も家族で野球が好きで、ヤクルトスワローズを応援しています。趣味は読書ですが、学生には、「坂の上の雲」「コンティキ号漂流記」「鬼平犯科帳」の3冊をよく薦めています。どれも研究や教育での重要な視点が養える本です。

A3 本学の歯学部では教授42名中、6名の女性教授がおり、日本の歯学部では最も女性教員比率が高いです。ただ臨床系ではまだ少ないので、今後は臨床系での女性教員が増えることを期待します。また学生や院生の女性比率は高いですから、それと同じくらい高い比率で女性教員が増えて欲しいですね。

A4 育児や介護中の女性にとっても、週3日勤務など、自分に可能な勤務日を選択できるシステムがあればよいと思います。また年休の取り方を一日単位でなく、時間単位でも使えると、仕事が続けやすくなるでしょう。研究は継続性がありますから、パートタイムでも最先端のところにつながっていることで自分自身も安心するはずです。

A5 女性にはどんどんチャレンジしてほしいです。女性歯科医師が増えることは、新しい歯科医療の環境作りの大きな力になると思います。私は男女を問わず、いい家庭を持って、いい仕事をしてほしい。研究に打ち込むだけではなく、ライフとワークの両方があって、それぞれにおいて充実して欲しいです。

わくわく保育園が開園しました！

本学の職員および学生の仕事や学業と子育ての両立を支援するため、平成22年4月1日に湯島キャンパス6号館1階に「わくわく保育園」が開園しました。現在、常時保育は8名が利用しています。一時保育は24名が登録され、毎日1～2名が利用しています。

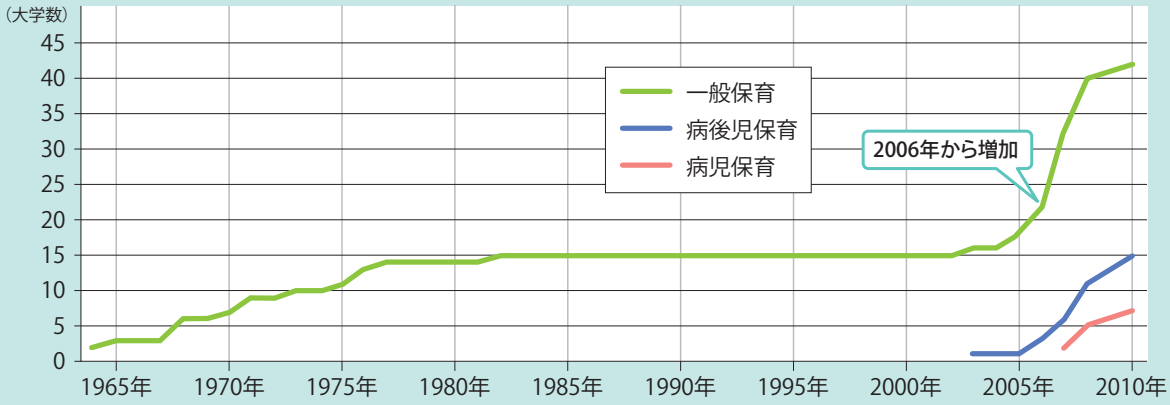
はじめに、保育園ができるまでの歩みを見てみましょう。

わくわく保育園ができるまで

女性研究者支援室では、平成21年3月にシンポジウム「都市部大学／大学病院における保育・病児保育について考える」を開催し、東京大学や東京女子医科大学などにおける保育・病児保育の試みを伺いました。都市部大学での学内保育設置には様々な課題がありますが、学内保育施設は非常に重要であることを認識しました。5月には本学救命救急医学分野の三高 千恵子准教授が中心となって「一般保育ならびに病児保育施設設置の要望書」の署名活動が行われ、1,603名の署名が学長に提出されました。

8月に当室が実施したアンケート「湯島・駿河台地区における保育に関する意識および現状調査」では、学内の一般保育施設設置の賛成率は、女性86.3％、男性73.7％という高い回答を得ました。平成21年12月と平成22年1月に保育園説明会が開かれ、多くの教職員および学生が集まり、1月に行われた公募の結果、保育園の名称が「わくわく保育園」に決まりました。

●医学部のある国立大学 42大学の保育所設置数



大学内保育施設は1970年代前半には、主に附属病院の看護師を中心とする教職員の福利厚生要求によって設置されました。2006年度に文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業が始まり、出産・育児をしながら研究を続けるための支援が始まってからは、保育施設を有する大学数が急速に増加しました。

※病後児保育：病気の回復期にあり、一般保育施設の集団生活に適さない子どもが対象
※病 児 保 育：病気にかかっている子どもが対象

わくわく保育園開園式

平成22年3月23日（火）に「わくわく保育園」の開園式が行われました。4月からの入園予定の子どもたちとご両親も招待され、50名余りが出席しました。谷口 尚副学長と、保育園のサービスを運営しているピジョンハーツ株式会社の赤松 栄治社長からご挨拶がありました。大山 喬史学長によってテープカットが行われ、谷本 雅男理事と谷口 尚副学長によって「わくわく保育園」の看板が掲げられました。

わくわく保育園見学会

開園式の後には、わくわく保育園内部の見学会が行われました。保育園の内部は、子どもの年齢に応じた乳児室や、ほふく室、保育遊戯室に分かれています。子どもの年齢に応じたおもちゃや絵本、おままごとセットなどが置かれ、また子ども用のトイレやシャワー室も備えつけられており、具合が悪くなった子どものためには安静室があります。施設内では温かい給食を提供するための調理室もあり、給食はアレルギーの子どもにも対応しています。

わくわく保育園の概要

わくわく保育園の利用対象者は、本学の教職員および学生です。
入園希望のお申し込みは、ホームページ（http://www.tmd.ac.jp/cmn/syokuin/wakuwaku/index.html）をご覧下さい。

保育対象：生後57日目から小学校就学前の乳幼児

定　　員：27名

保育時間：基本保育 7時30分～18時00分
延長保育 7時00分～7時30分
18時00分～20時00分

休 園 日：土・日曜日、祝祭日、年末年始（12／29～1／3）

保育料金：常時保育 月額70,200円（延長保育料別途）
一時保育 350円／30分（登録料、食費等別途）

利用者の声

大学内に保育園があるので、とても安心して子どもを預けることが出来ています。研究室を出て5分以内に迎えに行けるので、研究も気持ちに余裕をもって出来る様になった気がします。
自宅のある地域では待機児童数が非常に多く、入園出来なかったので、今年から学内の保育園が開園となり、とても助かっています。

大学院博士課程学生、1歳児母

学生なので、地域の保育所へ入所申込をしても8～9割通りませんでした。通学途中に下車して私立の保育所に入れるよりも、学内保育園の方がよいと思いました。こちらですと1日1回授乳に来ることもできますし、医局の先生に子どもを見せることもできます。

大学院博士課程学生、6か月児母

通常の保育園は4時で閉園ですが、こちらは6時まで開いているので便利です。
子どもたちもとても楽しそうにしています。

大学院博士課程学生

子どもをわくわく保育園に入れることができて、仕事の面においても、生活の面においても助かっています。学内に保育所があるので、研究室に早く来ることができるようになり、また遅くまで仕事を続けることができるようになりました。さらに、仕事が終わった後に子どもと一緒に公園へ散歩に出かけることもできるようになりました。また、夫の職場も近いので金曜日には家族皆で東京ドームへ遊びに行くこともできるようになりました。

特任講師、2歳児母

Seminar

性差医学・医療セミナーを開催しました。

第5回 2010年1月21日(木)	「ジェンダーの公正さとは何か ～女性と男性の「公正」について」 本学女性研究者支援室 小島 優子 特任助教
第6回 2010年2月2日(火)	「循環器医療における性差医学」 日本性差医学・医療学会理事および性差医療情報ネットワーク代表 天野 恵子
第7回 2010年2月22日(月)	「性差医学・医療：臨床から医学教育まで」 東京女子医科大学 東医療センター性差医療部部長 片井 みゆき 准教授
第8回 2010年3月18日(木)	「性特異的機能と行動の発達メカニズム ～雌雄間の脳キメラの解析から～」 北里大学 一般教育部生物学 浜崎 浩子 教授

第5回 性差医学・医療セミナー●平成22年1月21日(木)に、第5回性差医学・医療セミナーを開催しました。講師に本学女性研究者支援室の小島 優子特任助教が、「ジェンダーの公正さとは何か～女性と男性の「公正」について」という講演をしました。ジェンダーについて、「①性別そのもの、②自分の性別が何かという意識、③社会的に作られた男女差(ジェンダー差)、④社会的に作られた男女別の役割(性役割)という意味において使わる」と説明がされ、「生物学的性(セックス)と文化的性(ジェンダー)がどのように絡まり合っているかを見出し、そこから認識の変革を促すことが、ジェンダーを哲学的に捉えることの意義である」と述べました。

また、女性と男性との「公正」とは何であるかについてＪ・ロールズ『正義論再説』をもとに考察し、男性と女性との文化的・社会的な相違に対してどのように対処することが「公正」であるかについて、講演を行いました。

第6回 性差医学・医療セミナー●平成22年2月2日(火)に、第6回性差医学・医療セミナーを開催しました。日本性差医学・医療学会理事および性差医療情報ネットワークの天野 恵子代表から、「循環器医療における性差医学」についてご講演がありました。

天野代表は、我が国の平均寿命の変遷について触れ、この背景には、国民の教育の普及、経済発展に伴っての公衆衛生の改善、生活の質の改善、医療の発展等があり、また国民皆保険の導入、各種健康診断の普及が国民の健康における安全性を高めた、と振り返られました。

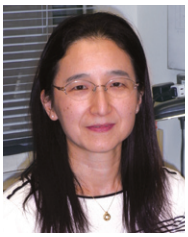
平均寿命や疾患罹患、死亡、出生にも性差があることを示され、「性差医療とは男女比が圧倒的にどちらかに傾いている病態、発症率はほぼ同じでも男女間で臨床的に差を見る疾患、いまだ生理的、生物学的解明が男性または女性で遅れている病態、社会的な男女の地位と健康の関連などに関する研究を進め、その結果を疾病の診断、治療法、予防措置へ反映することを目的とした医療改革である」と述べられました。日本で女性外来が展開された状況についても振り返られ、「今後も性差医療の教育・研究や、性差医療を担当する医師の養成、患者への情報発信を続けていきたい」と展望を述べられました。

第7回 性差医学・医療セミナー●平成22年２月22日(月)に、第7回 性差医学・医療セミナーを開催しました。東京女子医科大学から片井 みゆき准教授(同大学東医療センター性差医療部部長)から、「性差医学・医療：臨床から医学教育まで」についてご講演がありました。

片井准教授は、信州大学において、性差医学の系統講義を医学部の授業に導入され、現在は、日本で初めて「性差医療」を冠した大学病院での診療部長を務めておられます。患者数は増加し続けており、各科が連携した女性医療そして性差医療が次第に認知されつつあることを実感している、とのことでした。

今後は男女差だけの研究をするのではなく、男女差を作っている内分泌的環境も合わせて配慮することが大事である、と述べられ、また今後の性差医療の普及によって、性差を意識した診断・治療が可能になり、性差とともにライフステージを意識した診断・治療が可能になる、との具体的な展望を述べられました。

第8回 性差医学・医療セミナー●平成22年3月18日（木）に、第8回性差医学・医療セミナーを開催しました。北里大学一般教育部生物学の浜崎 浩子教授から、「性特異的機能と行動の発達メカニズム ～雌雄間の脳キメラの解析から～」についてご講演がありました。



浜崎教授は平成21年3月まで、本学の難治疾患研究所・分子神経科学分野の准教授でおられ、また当女性研究者支援室の支援対策会議委員としても活動をしておられました。今回のセミナーは、浜崎教授が北里大学に移られてから初めての、本学でのセミナーとなりました。

多くの動物には雌雄がありますが、雌雄のどちらかであるかは普通卵巣をもつか、精巣をもつか、という生殖器の特徴によって決められています。そして女性的、男性的といった行動や考え方などの脳機能に関しても、多くの場合には生殖器の雌雄に一致した性分化が見られます。脳の性分化に関しては性ホルモンによる支配が大きいことが知られていました。浜崎先生のグループは、雌雄間で未分化な脳を入れ替えることによって、性ホルモン非依存的に、脳細胞自律的に決定される性分化について調べています。行動やホルモンの状態は生殖腺の影響下にありますが、雌の性成熟と周期的な産卵は本来の雌の脳をもっていなければ正常に起こらないことを明らかにしました。

この研究により、女性にみられる生殖機能の不具合、あるいは性同一性障害がおきるメカニズムについて解明する糸口になることが期待されます。ご講演後には参加者から多くの質問がなされ、活発な議論が行われました。

Child Care

平成22年度「派遣型病児保育事業」を開始しました。

本学は、派遣型病児保育に取り組んでいるNPO法人フローレンスと法人契約を結び、共同で派遣型病児保育メディカル＆アカデミックパッケージを開発しています。平成22年度募集には、学内から7名の申請がありました。申請者からは、「いざという時に利用できる、という安心感がある」とのコメントがありました。

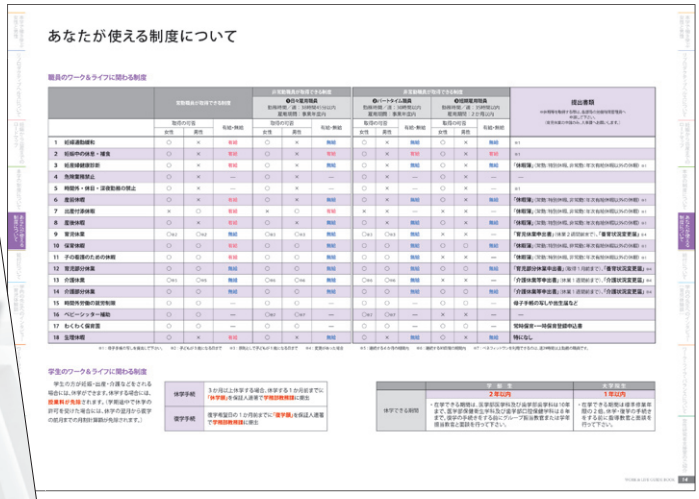
Publication

「ワーク＆ライフ ガイドブック」を作成しました。

女性研究者支援室では、女性の皆様が妊娠・出産・育児を経ても仕事や研究を続けていくために、そして、学内すべての方の、ワーク・ライフ・バランスを充実させるために「ワーク＆ライフ ガイドブック」を作成し、学内の教職員と学生に配布しました。

女性たちが妊娠・出産などのライフイベントを経ても安心して研究を続けていくためには、それをサポートする制度が学内で周知され、また実施されることが必要です。このガイドブックで本学での様々な制度や国の法律などを知り、皆様のワーク・ライフのお役に立てて頂ければと思います。

ご希望の方は当室までお問い合わせください。



Seminar / 2010.6.10

第4回 ANGELセミナーを開催しました。

平成22年6月10日（木）に、第4回ANGEL Seminarを開催しました。講師に東北大学大学院医工学研究科教授で、女性研究者育成支援推進室副室長の田中 真美先生から、「東北大学における女性研究者支援のこれまでとこれから」についてご講演がなされました。

最初に、東北大学で平成20年まで行われたモデル事業の内容について説明がなされました。続けて平成21年度から取り組んでいる「女性研究者養成システム改革加速事業」について説明がなされ、育児・介護支援、環境整備、次世代支援の各プログラムについて、前事業からの推進状況を知ることが出来ました。加速事業に関しては、応募の方法や、実行上の問題点など、医学生、研究者、医員、学内関係者から活発な意見があり、本学における事業推進の意識が高まりました。同時に、加速プログラムを採択している大学の試みを具体的に知ることができました。

Career Support

平成22年度研究支援員配備モデル事業を開始しました。

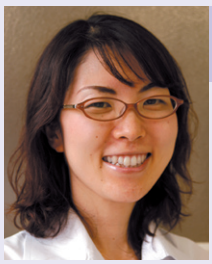
平成22年度研究支援員配備モデル事業には、13名が採択されました。（五十音順）

東 亮子さん …… 医学部附属病院・検査部
太田 英里子さん …… 医歯学（医系）・血液浄化療法部
大野 京子さん …… 医歯学（医系）・眼科学
黒川 洵子さん …… 難治疾患研究所・生体情報薬理学分野
Safronova Olgaさん …… 医歯学（歯系）・Global COE Program, 分子細胞機能学
隅田 由香さん …… 歯学部附属病院・顎顔面補綴学分野
中田 秀美さん …… 歯学部附属病院・インプラント口腔再生医学
中根 綾子さん …… 歯学部附属病院・高齢者歯科
成瀬 妙子さん …… 難治疾患研究所・分子病態
西澤 綾さん …… 医学部附属病院・皮膚科
蜂屋 瑠見さん …… 難治疾患研究所・分子代謝医学分野
村瀬 舞さん …… 歯学部附属病院・顎顔面補綴学分野
森田 久美子さん …… 保健衛生学・健康教育学

研究支援員採択者インタビュー

研究支援員を採択されている3名の先生に、実際にどのように活用されているか、お話を伺いました。

Q1 配備事業を使われて、お仕事の面、プライベートの面、どんなことが変わりましたか？
Q2 当事業が本年度で終了後、学内でどのように制度化していくのがよいと思いますか？
Q3 当事業へのコメントを頂けますか？
Q4 次世代の女性医師・研究者へのメッセージをお願いします。



村瀬 舞さん　歯学部附属病院 顎顔面補綴学分野

A1 研究支援員の方に研究業務について多くのサポートをしてもらえるようになり、研究の細かな部分に目が行き届くようになりとても感謝しております。またプライベートでは時々保育園に早めに迎えに行くことができ、それに伴って夕食時の会話の時間が増えました。早く食べさせ、早く寝ることばかりが気になっている日々の生活だけでは得られなかった時間でした。そのような些細なことが子供と向き合えている実感を得られ非常にうれしく思っております。

A2 ワーク＆ライフ ガイドブックが配布されたことで、本学内における出産、育児と仕事の両立について大変わかりやすい指針が示されたように思います。本事業も本学の特徴的な支援策として広く周知され、また利用の裾野が広がるようになると良いと思います。

A3 本事業ではマンパワーを研究者に直接的に補充してもらえるため、非常に画期的であり、仕事の能率化にはとても有用であると感じております。私もこのような制度を広げていけるよう、自身の研究成果の向上に努めたいと思っております。

A4 私自身、妊娠、出産、育児等のライフイベントがどういうものかということは実際にその状況に直面してみて初めてわかることばかりだと実感しています。次世代の女性医師・研究者の方々は自分で選択した仕事に対して強いやりがいを感じていることでしょう。その気持ちが家庭と仕事を両立させてみようという意欲につながるように思います。私はまだまだ新米で家庭も仕事もとても十分にこなせませんが、皆様とともに頑張っていきたいと思っております。

Safronova Olgaさん　大学院医歯学総合研究科 分子細胞機能学分野

A1 支援員の方は、現在取り組んでいる実験になくてはならないサポートをしてくれます。そのお陰で、自分の専門分野の最新のニュースや論文に触れることができました。実験台から離れる時間が増えたことで、次に投稿予定の論文のことをじっくり考えたり、次の研究を計画してプロトコルを更新したり、新たな技術を学ぶ時間が増えました。お陰で今は、以前から取り組んでいる研究プロジェクトをまとめて、論文に投稿することを考えています。また、次の研究のプロポーザルも計画していますが、それは支援員の方のサポートなしには行うことはできません。もちろん、私が以前よりも早く帰宅できるので息子は喜んでいますし、私自身も実験のことを心配してストレスを抱えることがないので、息子はそんな私を見て喜んでいます。

A2 このプロジェクトが継続し、研究と育児を多面的に支えて行き、長期の支援につながればよいですね。また、支援の申請スケジュールの幅が更に広がり、どの月からも支援が受けられるようになると良いように思います。実際に多くの母親は産後わずか数ヶ月で仕事に復帰し、4月1日になる前に復帰せざるを得ない状況です。育児休暇中にも支援の申請ができれば、復帰後の母親がより早く仕事に慣れ、ストレスを和らげることにも役立つでしょう。更に、この支援員配備事業の対象をシングルファーザーや、病気の子供を持つ父親にも広げるのもよいと思います。また、支援を受けられる期間が長くなれば（1年間など）、よりよいと思います。

A3 この支援員配備事業は、多くの若い母親が仕事を続けようと決心するのに役立つと思います。働く母親は、睡眠を取る時間があまりなかったり、家事も抱える一方で、職場では他の研究者（男性と女性の両方）と互角に競争しようと奮闘しています。ですから、この事業は働く母親にとって大変重要ですし、特に小さい子供を持つ母親には重要です。

A4 高いゴールを持ち、自分の成功を信じていればそれを手に入れることができます。しかし、すべてをこなしたいと思っていても、完璧に行うことは不可能ですし、ストレスやうつ症状を起こしかねません。だからこそ、仕事と家庭とで適切なバランスを保つことは重要です。人生で多くのゴールを手に入れる唯一の方法は、物事の優先順位を選択し、選んだものに集中することです。更に重要なのは、自分の計画には柔軟な姿勢を持ち、状況に応じてその優先順位を変えられることです。支援を求めたり、家族や同僚から理解を求めようとすることも大切です。自分自身を信じれば、すべてのゴールを手に入れることができます。

東 亮子さん　医学部附属病院検査部／循環器内科

A1 私は息子が2人おり、お迎え時間というタイムリミットがあるため、日常臨床業務をこなすのみで毎日が過ぎてしまう状態でした。研究支援員の方にサポートをお願いしてからは、研究で必要となる時間のかかる画像解析・データ収集をしてくださり、大変助かっております。研究支援員の方は、即戦力として動いてくれると同時に学びたいという積極的な意欲のある方なので、私も支援員の方も共に研究を通して成長していると思います。プライベート面では、研究活動が進まないことがストレスでもあったので、家庭での笑顔が増えたかもしれません。

A2 出産後の研究者が一人で悩むことなく、将来について一緒に考えてくれるような女性のトータルサポートシステムと人員的支援が制度化されたらと思います。また、研究者だけでなく、出産後の臨床系女性医師が復職しやすい職場環境となるよう、育児中の医師によって生じる臨床業務負担が他の医師の負担とならないような人員的支援システムも含め、育児中の女性医師をトータルサポートするような制度ができたらと願っております。

A3 今回、臨床系医師にも研究支援の対象を広げて下さったことに感謝しております。

A4 「育児と仕事の両立は無理」と諦めないでほしいです。医師・研究者として成長することも大事ですが、母親となり育児を経験することは、自分自身の成長につながり仕事面にも活かされると思います。「医師・研究者である自分」か「母親である自分」か迷うのでなく、女性だからこそこの両者を経験できることをプラスに考え、前向きに頑張ってください。

Conference / 2010.5.26・6.15

学会発表

●平成22年5月26日(水)に、本学女性研究者支援室の荒木 葉子特任教授が、日本産業衛生学会(会場:福井市)にて発表しました。演題は「医歯学系大学における保育に関する意識および現状の性差について」として、本学で実施した保育アンケート結果から「大学および大学病院にとって、保育施設は人材戦略上重要である」と報告しました。

●平成22年6月15日(火)に、女性研究者支援室の有馬 牧子特任助教が、The 4th International Commission on Occupational Health(会場:アムステルダム市)にて発表しました。演題は"The survey of researcher's attitudes towards continuing work after pregnancy and child rearing in a Japanese Medical Institute"とし、本学で昨年実施した「研究室環境アンケート」を基に行った分析結果を発表しました。女性研究者・医師がキャリアを続けていくには、妊娠中・育児中においても研究や仕事を継続していける環境整備が必須であり、更なる状況把握のために追跡調査をしたいと考えています。

Gathering / 2010.6.2・6.8

ANGEL staff事業が始まります。

本学の大学院生が、学生自身が必要と感じているプロジェクトを自主的に運営する事業を企画しました。このスタッフを「ANGEL staff」と名づけ、平成22年6月2日(水)と6月8日(火)に、「ANGEL staff」事業に関する「意見交換会」を開催しました。大学院生10名余りの参加者があり、「理系大学院生のための企業の説明会を開催してほしい」、「女性先輩の話を聞きたい」、「他大学女性研究者と交流したい」、「他大学と就職情報会などを共有したい」等の声が挙げられました。8月から、ANGEL staffの活動が始まります。

INFORMATION

今後のセミナー開催のご案内

第6回 ANGEL Seminar 2010年9月7日(火)17:00〜18:30	「工学の新しいパラダイム ―生体医工学の拓く未来―」 東京大学生産技術研究所 大島 まり 教授
第10回 性差医学・医療セミナー 2010年9月16日(木)17:00〜19:00	「循環器医療における性差医学」 Director of Berlin Institute of Gender in Medicine, Center for Cardiovascular Research Prof. Dr. Vera Regitz-Zagrosek
第11回 性差医学・医療セミナー 2010年10月14日(木)17:00〜19:00	「社会行動制御へのオキシトシン・オキシトシン受容体の寄与 ―雄と雌でみられる同一性と性二型性―」 東北大学農学研究科応用生命科学専攻 西森 克彦 教授
第12回 性差医学・医療セミナー 2010年11月11日(木)17:00〜19:00	「性差薬学について」 千葉大学薬学部 上野 光一 教授

編集・発行

東京医科歯科大学 女性研究者支援室

Activation of Gender Equity / Gender Medicine and Enrichment of Life (Angel Office)

〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45 1号館519号室

E-mail:info.ang@mri.tmd.ac.jp TEL:03-5803-4921 FAX:03-5803-0246

http://www.tmd.ac.jp/mri/ang/